



仏法領ぶつぽうりょう

第91号

発行：真宗大谷派
 念信寺
 〒824 - 0202
 福岡県京都郡みやこ町
 犀川上高屋761
 ☎ 0930-42-0329
 Fax 0930-42-0502
 ホームページ
nenshinji.org
 メールアドレス
nenshin@pony.ocn.ne.jp

「人として生まれて」

今年三・四月は親鸞聖人の誕生八百五十年の慶讃法要が勤まる。

聖人には人として生まれたことについての深い注目がある。



「生まれて生きる」

生きていると
 嬉しいこと
 辛いこと
 悔しいことが
 たくさんある



それが生きているということなのか
 辛くても生きる
 寂しくても生きる
 世に生まれてきたのだから
 母も父もそう願ったに違いない
 でも疲れたときは
 さぼって生きていてもいいと思う
 それが
 生きているということかも
 知れない

(写真・文 大迫光浩)

カエルの子はカエルだけど、人は生まれてから一人前になるのは大変だという。人間が生きていくためには本能だけでなく、社会性を身につけ様々なことを学び、自分で考え判断して行動しなければならない。

現代の生活では、水は「H₂O」という化学式で表わされ、コンビニで百円ちょっとで買える。科学と流通の発達のお陰だけど、一杯の水と私との関係は明らかにならない。拝んでいただくことを忘れてしまったのだ。

水がどこにでもある水だから、この私もどこにでもいる私なのだ。満足を自分に感じる事ができず、つい自分の感覚的な快楽を価値基準にしてしまう。しかし、かけがえないこの一杯の水を美味しく飲みほすということは、世界を自分にいただくことなのだ。

コロナ禍以降、葬儀も「家族葬」の傾向が強まり、人の死はひっそりと個人的なものになってしまい、共にお見送りをして生きることを学ぶかけがえない大切な場を失おうとしている。

死は別れであり辛いことなのだけど、本当は生きることに深く結びついていて、広い視野を開く扉になっている。見送ることを通して自分もやがてこの世と別れる準備をさせてもらう。より深く生を学ぶ場である。死は暗く怖いものではないのだろうか。自分を中心にしてちっぽけな心を満たそうとしか思っていない自我中心の自分への問いかけなのだ。自我の苦しみはそのように問いかけていて、もっと広大な世界のあることを教えている。

受けとめる大地のありて椿落つ

(住職)



